【千葉】全国最多の摂食障害治療実績「県全体で患者を支えたい」-河合啓介・国府台病院心療内科診療科長に聞く◆Vol.1

県の主要病院と連携し、ネットワークづくりに取り組む

2024年9月12日 (木)配信 m3.com地域版

専門の医師が少ないと言われる摂食障害の分野で国内最多の治療実績がある国立国際医療研究センター国府台病院（市川市）。同院で心療内科診療科長を務める河合啓介氏は学生時代から「人間の心と体を診られる医師になりたい」と志し、日本の心療内科発祥の医療機関である九州大学で学んだ。現在は摂食障害患者を千葉県全体で支えようと医療連携にも注力している。河合氏のこれまでと現在の取り組みを聞いた。（2024年8月16日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

河合啓介氏（本人提供）

高校時代の経験から人間の心と体の関係に関心

――河合先生は全国でも多くはない心療内科専門医です（2024年2月1日現在304人）。まずは、この道を進んだ経緯をお聞かせください。

「自分は何者で、どんなふうに生きると良い人生になるだろう」――。そんなことを高校生のころに考えていて、理系と文系のどちらに進むか悩んでいました。そんな時期に関心を持ったのが、人間の心と体の関係です。緊張すると眠れない人がいることは当時から知っていましたし、私自身、ストレスで食欲が減った経験もありました。「こんなとき、人間の体に一体なにが起きているんだろう」と面白みを感じて医学への興味がわき、「医学部に行くのであれば精神科か心療内科だろう」と、漠然とですが想像していました。

――愛媛大学医学部への進学後もその関心を持ち続けたのですね。

心と体の両方を診られる医師になりたいと学生時から考えていて、心療内科を学べる研修先を探していました。見つけたのが、九州大学です。当時は全国でもこの分野の講座を設けている大学は少なかったのですが、九大では池見酉次郎（ゆうじろう）先生が1961年に国内初となる現心療内科の「精神身体医学研究施設」を開設し、診療の担い手を育成していました。池見先生は日野原重明先生らと共に1960年に日本心身医学会を設立するなど、日本の心身医学のパイオニアとして知られています。

私は学生時代に池見先生の本を読んでストレスと体の関係に関心を持っていました。当時の先端医学は遺伝子や細胞のシステムに向かっていたように思いますが、その一方で、人間の心と体、社会的なストレスに着目して内科系の

疾患と結びつける重要性が見過ごされているように感じていました。面接やカウンセリングなどを通して患者さんのストレス要因が緩和することで、病気やつらさが改善に向かうのではないか、と。「思い立ったらまず動こう」と1989年に愛媛大学を卒業後、九州大学の心療内科に入局しました。

摂食障害注力のきっかけは「難しかったからこそ」

――河合先生は摂食障害の診療に注力してきました。きっかけは九州大学での研修時にあるのでしょうか。

心療内科病棟で初めて担当したのが、10代後半の摂食障害を抱えている女性患者さんでした。彼女は拒食症で痩せており、そのために「体がだるい」「朝に起きられない」「長く立っていられない」などと訴えていました。一般的な病気であれば「体重を増やして体力をつけましょう」と治療プランを提示できますが、彼女は「痩せたまま元気になりたい」という相反する課題がありました。

35年前の当時、摂食障害は治療法がまだ確立しておらず、個々の医師が職人技のように治療している状況でした。私はチームの一員として「なんとか良くなっていただきたい」と奮起しましたが、あまり良いアプローチができないまま彼女は退院していきました。「こんな病気があるのか」と肌感覚をもって知ったこと、そして、熱意をもって臨んだにもかかわらずうまくいかなかったこと、その「うまくいかなさ」により、興味が深まったのです。

――河合先生は九州大学などを経て2016年に国立国際医療研究センター国府台病院に入職し、心療内科診療科長に就任します。同院は摂食障害の治療実績が国内最多だとか。

研修時に摂食障害の治療に関心を持った後、「もっと体のことも勉強したい」「医師として基礎医学の能力を高めたい」と思い、カナダのトロント大学で内分泌の研究をするなど10年ほどの研さんを経て九大に戻りました。2006年から同大心療内科講師、2016年に国府台病院へ、という流れです。

厚生労働省の統計によると、当院における摂食障害の入院患者数は2022年度まで7年連続で国内最多です。近年は年間延べ150人ほどが入院しています。

定期的に勉強会を開催、「顔の見える関係」で連携進む

――摂食障害の治療は専門の医師が少ないと聞きます。病病連携・病診連携も重要になってくるのでしょうか。

重要であり、その点で千葉県では連携に力を入れています。当院を含めた県内の主要施設が協力し、役割を分担しながら患者さんをうまく受け持てるよう仕組みづくりに取り組んでいます。例えば、県内には中央に千葉大学があり、南部に亀田総合病院、東部に総合病院国保旭中央病院、北部に成田赤十字病院、そして、西部には当院があります。これらの基幹病院と地域の病院・クリニックが連携して、重症の患者さんは基幹病院が担当し、患者さんが改善してきたらほかの医療機関でも診ていく、というように、県全体で患者さんを支えられるようネットワークづくりを進めています。

そのための活動の一つが、7年ほど前に立ち上げた「千葉県摂食障害研究会」です。私と県の福祉担当、千葉県精神保健福祉センターの職員が話し合う中で案が持ち上がり、以来、年に2回ほどのペースで医療従事者による勉強会を開いています。やはり、「顔の見える関係」は大切だと感じています。オンラインを含めて症例報告をしたり、飲食を共にしたりすることで互いに患者さんを紹介しやすくなるほか、大きな病院ではないところでも摂食障害の治療を行っている医師はいて、そんな地域の医療従事者と出会える貴重な場となっています。

立ち上げ当初は当院が主催していましたが、現在は千葉県子ども病院や国際医療福祉大学成田病院など複数の医療機関の持ち回りの研究会になったことで、より円滑に開けるようになりました。ほかの自治体でもこうした活動を行おうしている話は聞きますが、うまくいっている事例は全国でも少ないのではないでしょうか。

◆河合 啓介（かわい・けいすけ）氏

1989年愛媛大学医学部卒。九州大学心療内科、カナダ・トロント大学内分泌研究所などを経て、2006年九州大学心療内科講師。2016年に国立国際医療研究センター国府台病院に入職し、心療内科診療科長に就任。日本心身医学会理事・心身医療（内科）専門医・指導医、日本心療内科学会理事・専門医、日本摂食障害学会理事、日本内観学会副理事長、日本心理医療諸学会連合（UPM）理事長など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索